



Title	あるがままを欲するということ : 「注意深い観察」をめぐるナイチンゲールの思索
Author(s)	大北, 全俊
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/251
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 おお きた たけ とし 大 北 全 俊

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 19008 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 16 年 9 月 24 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当

文学研究科文化形態論専攻

学 位 論 文 名 あるがままを欲するということー「注意深い観察」をめぐるナイチンゲールの思索ー

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 鷺 田 清 一

(副査)

教 授 中 岡 成 文 専任講師 紀 平 知 樹

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、看護の本質を「注意深い観察」として捉えるフローレンス・ナイチンゲールの看護論を手がかりにして、ひとが他者を前にして「自律した主体」として存在することの意味を、哲学的に論じるものである。

第1章では、ナイチンゲールがその看護論において、病気を「自然によってすすめられる回復過程」と考え、看護をその「自然のはたらきを邪魔しない」こととして捉えたことの意味を考察する。病気は「世界」のなかで生じる他の出来事と同様、「必然的」に生じたものであり、看護のいとなみというのはそうした「自然のはたらき」によるその回復過程に服従せよとの「呼びかけ」に応えることであると、ナイチンゲールは言う。ナイチンゲールは看護を、看護する者と患者という二者関係によって捉えるのではなく、「わたし」と「自然」と「他者」という三者関係において捉えているのであり、そこから論者は、この看護関係において「自然」を介して「他者」の前に立つ「わたし」とは何者かという問いへと移行していく。

第2章では、まず、看護とは「注意深い観察」のまなざしを患者とその環境に向けることであるというナイチンゲールの看護理論を詳しく考察する。そこで要求されるのは、「不断の自律」ということである。それは、看護する者がその認識能力の有限性をみずから受容しつつ、看護実践のなかでたえずそれを吟味し、修正する態度のことである。

「不断の自律」とはその意味で、「注意深い観察」というかたちでつねに「自然」と「他者」に開かれていることである。この「観察」は、「わたし」に単なる事実を知らせるだけではなく、むしろ「わたし」にある態度をとるよう選択を迫る「問いかけ」にはかならず、その意味でナイチンゲールは、「正確な観察習慣を身につけないかぎり、われわれがどんなに献身的であっても看護婦としては役に立たない」と言い切る。論者はここに、世界は認識の対象であるよりも、絶えず「わたし」に何を欲するのかを問いかけてくる「課題」として課せられていると考えるナイチンゲールの、カント的な思考との類似性を読みとる。

第3章では、論者は第2章の議論を承けて、その「注意深い観察」が、世界への「信頼」の条件を準備すると解釈する。病気を自然による回復過程と捉えることは、「あるがまま」を欲するということが世界の必然性への同意を、また「わたし」自身の決定的な「不自由」への同意を意味し、それゆえにその過程における「注意深い観察」は回復を祈って「待機」しつづけるということを意味する。つまり観察は、「世界への信頼」によって裏づけられているのであって、これがたんなる無為と異なるのは、観察が事象と事象とのあいだにそれまで見えなかったある必然的な関

係（法則）を見いだすことだからである。観察のまなざしを世界に、そして他者に向ければ向けるほど、いままで気づかれていなかった関係が姿を現わすということ、そこに「注意深い観察」を看護といういとなみの核に据えたナイチンゲールの看護論の意義があるとして、論を締めくくる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ナイチンゲールの看護理論を哲学的な観点から解釈したおそらくは現代日本における唯一の論考である。それもたんなる文献の解釈にとどまらず、看護実践について語ろうとする論者の言説の位置を吟味しながらナイチンゲールの看護理論を論ずるという点で、哲学的な自己省察としての深まりも十分にうかがわせる論考である。

実際、看護実践の意味するところを哲学的に基礎づけようとするなかで、ナイチンゲールの、「負債」をゼロとするような「賠償義務」としての看護の特性づけや、看護の本質を「注意深い観察」に見る視点が、周到に取りだされていると同時に、その背景で（とくに註で持続的に）カント倫理学やシモーヌ・ヴェイユの「注意力」をめぐる議論と比較対照され、〈ケア〉という問題が哲学・倫理学にとって現代、どういう問題地平を形づくるのかを慎重に吟味してきている。

しかし、さらにその背景にあるナイチンゲールの宗教的な信念についての批判的検討はまだ十分になされていない。病気が「自然のはたらき」による回復過程であるという、ナイチンゲールのあまりにもコズミックな主張そのものの吟味がなされていない分、その回復過程の「邪魔をしない」とことという看護行為の最初の規定には、看護経験の実際と相当にかけ離れた印象がつきまとう。同じことを別の観点から言いかえれば、ナイチンゲールの思考が、現在の看護論においてどのような位置づけをされているのかについての検討ももっとなされるべきであったということである。この点で、ナイチンゲールにおける形而上学的思考と、その看護実践上の（現代医療のなかでもかなり啓発的な）さまざまな具体的な指摘とのあいだの架橋が十分になされているとは、残念ながら言えない。論者には、今後、理念レベルというよりはナイチンゲールによる具体的な看護実践への提言をさらに哲学的・論理的に解釈する作業を期待したい。

とはいえ、看護現場でともすれば格言のように受け取られてきたナイチンゲールの思想をはじめて哲学的に検証したという点で、本論文がナイチンゲール研究に大きく寄与するものであることは疑いない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。